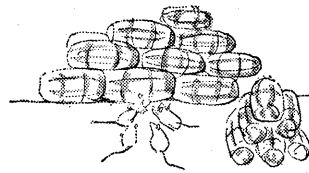


## 洞窟の話

関 一 敏



1

ソウル市中心部をやや南西にはずれた地点に切頭山という小高い丘がある。議事堂や六〇階の超高層ビルディングの林立する汝矣島<sup>ヌイド</sup>を漢江<sup>ハンガ</sup>ごしに遠望できる見晴しのよい場所である。この地は韓国カトリックの殉教の聖地として知られている。一八六六年、数知れぬ信者たちが少数の例外をのぞいてその名はおろか、正確な数すら歴

史に記憶をとどめないままに処刑された。現在、丘の上には殉教記念館がたち、さほど広くはないが手入れのよくいきとどいた庭園を見おろしている。今年の五月三日、教皇ヨハネ・パウロ二世が野外ミサを開いた庭である。その庭のほうから殉教記念館を見ると、建物の下、漢江より丘の麓にぼっかりとコンクリート製のほら穴のあいているのが分る。穴の右上方に白い聖母像がおかれていて、なるほどルルドの洞窟を再現したものに違いな

い。左奥はさらに小さくぼみになっているから、あるいは水の流れてる仕組みなのかもしれない。この夏、一〇日ほどの短い韓国行のなかで初めてこの洞窟の前に立ったときには、ちょうど五年前に訪れたルルドの光景がそこに重ねあわされてくるようで、懐しいような、ちょっと口ごもらざるをえぬような不思議な思いにとらわれた記憶がある。

同じような洞窟は日本にもいくつもある。東京でいえば、目白の関口教会には原寸大の精巧な「ルルド」が庭に再現されている。フランス人神父ドマンジェルの尽力によって、一九一一年に作られたコンクリートの洞窟である。やや早目に出来あがった名古屋の主税町教会の「ルルド」も、関口教会のそれも、残念なことに奇蹟の泉はもっていないのだが、日本最初の洞窟模型である五島玉の浦（一八九九年）にはこれが備わっている。正確には井戸からひかれた水であり、その水による病治しの奇蹟譚を今も残している（志村辰弥編著『ルルドの出来事』中央出版社、一九五八、第三章）。模倣して作られ

た洞窟が新たに病治しの恩寵を与えたり、新しい巡礼聖地を縮小的にうみだしたりすることは、各地方地方の札所めぐりや七福神めぐりが絶えず再生産されてきていることを考えれば、さほど奇異なことではない。分社、勧請の思想と類比的な思考法はヨーロッパにもみいだされるのであって、そのはなばなしい例のひとつがベルギーのオオスタッカーだった。はじめ洞窟状にデザインされた水槽の上方に、城主ド・クールブルヌ侯爵夫人がルルドの聖母像を安置した（一八七二年）ところ、巡礼者が集まりはじめ、やがてその洞窟での顕著な病治しが発生するようになったと伝えられている（H.M. Gillett, *Famous Shrines of Our Lady*, Westminster, Maryland, 1950, pp. 214-6）。もっとも、この場合の奇蹟発生の経緯は、この記事ではきわめて類型化されていて必らずしも明瞭ではない。さしあたりここでは、洞窟・水・聖母・奇蹟というセットに注目しておきたい。

オオスタッカーに聖地のモデルを提供したルルドの出来事は、そのわずか一四年前、一八五八年のことである。その年の二月から七月にかけて一四歳の少女に白い服の女性が現われて、いくつかのメッセージを残した。

少女の名はベルナデット・スビルーという。白い服の女性が現われるのはいつも同じ場所、ルルドの町はずれを流れる河（ガヴ・ド・ポー）に面したマサビエルの岩場だった。残された記録では計一八回の出現を数えている。

最初の出現のもようをみてみよう。一八五八年二月一日の正午前、ベルナデットは妹と友達と連れだって河むこうの岩場に薪をひろいに出かけた。河と水車用の運河にしきられた一角に豚を放つ共用地があり、その西端から運河の浅瀬をわたれば岩場にぼっかりとあいたマサビエルの洞窟にいたる。せっせと浅瀬をわたってしまった連れの二人にとり残されて、ベルナデットは冷たい流れを前にためらっていた。喘息の持病があり、母親からむちやを禁じられていたからである。靴下をぬいで何と

か洞窟にたどりつこうとしているところに、突然「一陣の風」が耳をうったという。訝るベルナデットにふたたび風の音が響きわたり、洞窟のやや右上の小さくぼみにある野バラの枝々がざわめくのがみえた。そこに「柔和な光」につつまれた微笑があらわれ、白をまとった若い女性が人を招くように手をひろげて佇んでいる。恐れを感じたベルナデットはポケットのロザリオを手に十字を切ろうとするが震えて手が動かない。と、光の中の女性がロザリオをくりはじめたという。これをみて、ようやくベルナデットもひざまづいて祈ることができた。祈りののち、おいでという合図にためらう少女の前から突然その女性は姿を消してしまふ。

この不思議な女性の出現を体験することができたのはベルナデットひとりだった。同行した妹の口から親や学校に話が伝わり、ふくれあがる噂のなかで洞窟に群れつどう「信者」や「懐疑家」たちの数をいよいよ増していったのちも、この少女だけにしか光の女性がみえず、その声も他の者にはきこえなかった状況にかわりはない。

洞窟に集まった群れの数をあげてみると、四回目（八）

五回目（三〇）六回目（二〇〇）……十一回目（一一五

〇）一四回目（三〇〇〇）とふえつつけて、一五回目にはなんと八〇〇〇という信じがたい数値に及んでいる。

この大群衆のなかで唯ひとりベルナデットだけが洞窟の女性と交信できたということは、それらの群れのすべての目が、この少女の一挙手一投足に注がれる状況を生んだ。もちろんその目のことごとく最初からベルナデットの神秘体験に共感していたわけではない。いっぽうには少女につきまといその衣服の切れはしを手に入れようとする狂信的な人々があり、またいっぽうにはベルナデットをかたよばわりする嘲罵の渦があった。さらにその周囲には、洞窟に蝟集する群れに治安の関心をいだく町当局（役場・警察・裁判所）や、宗教上の関心からなりゆきを静観するルルド教会の人々がいた。ルルドの出来事には、だから一八回の出現をとおして、正確には一八回の出現時のベルナデットの所作や後からの説明をとおして、徐々に神秘体験への共感の輪をおしひろげてい

った過程をみることができる。七回目の出現時に初めてベルナデットをみた知識人のひとり、当時の美人女優ラッセルに少女を比したという逸話があるが、日常の起居動作をふくめて洞窟での出現体験をくりかえし多くの観客の前でなしおおせたという意味では、女優との比較ははずれではない。とにかく彼女が自分ひとりの体験を神秘的な共有すべき出来事として群れへと伝え、そこに共感の運動体を築きあげてきたことは一面の事実だからである。

### 3

ルルドの出来事を演劇との類比から理解することは、ベルナデットの神秘体験そのものに疑いをもつものたない立場とは何のかかわりもないことである。ベルナデットに限らず聖母出現の体験者すべてが置かれている共通の状況は、自分たちだけの超越的な体験が一方にあり、他方にその体験から何事かのメッセージを受けとめようとする（あるいは受けとめるのを拒む）一群の人々がい

るという構図である。しかもそのメッセージが体験者の知覚（みる・読む・ふれる・きく）を媒介としながら知覚を越えた彼岸からのものである以上、体験者による伝達が周囲の非体験者たちを巻きこむためには何らかの説得性がそこにそなわっていなければならない。いいかえれば、神秘体験者は神秘体験をみごとに演じきらねばならないことになる。

ベルナデットが洞窟の不思議な体験を演じきるためには、大きく分けて次の三つのあやうい段階をくぐりぬける必要があった。「あやうい」というのはベルナデットを媒介としてこの世に送りこまれる超自然的存在からのメッセージが、夢・世迷い言・狂人のたわ言として一笑に付されたり、悪霊のたぶらかしとして否定的に受けとめられたりする可能性をおおいに含んでいた分岐点のことである。

(1)「悪霊」説（二回目、二月一四日）と「煉獄の魂」

説（三回目、二月一八日）

(2)泉の発生（九回目、二月二五日）

(3)司祭の要求（一三―五回、三月二―四日）

まず(1)の初期段階をみてみよう。注意しておきたいのは一八回の出現をとおしてベルナデット自身の口からは「聖母」という言葉が一度もはかれていないことである。周囲の質問にも当局の尋問に対しても「婦人の形をした何か白いもの」とか「あれ」とかいう呼び方をしている。一体それが何者なのか、本当に聖母なのか、という執拗な問いは洞窟のまわりに群がる人々のものであってベルナデットのものではなかった。そしてこの問いに何らかの根拠をもった答をみいだしていったのもまたベルナデット本人ではなかった。「悪霊」説や「煉獄の魂」説というのはそうした周囲の人々による解答の試みのひとつであり、ベルナデットの所作や伝えるメッセージはそこにさまざまな判断の材料を提供していったのである。たとえば、洞窟の出現が悪霊ではないかという疑いは噂のひろがりはじめたごく初期のうちから家族や小学校のなかに生じていた。同じクラスの少女たちと出かけた二回目の出現では、この疑いを確かめるためにルルド

教会から聖水をもっていつて洞窟にふりかけている。その時「あれ」は微笑でこたえたとベルナデットは仲間たちに説明した。こうした出来事は「悪霊」説を否定するひとつの宗教的根拠を与えるだろう。

同じような実験は「煉獄の魂」説についても試みられている。「幼きマリアの会」(カトリックの在俗信者団体)のある夫人が、前年の秋に死んだ篤信の一女性エリザの霊ではないかという疑いをいだいた。出現する女性の名を確認するために、この夫人はベルナデットに紙とエンピツを預けた。三回目の出現のことである。出現中にベルナデットはこれを洞窟の方にさしだすみぶりをしたが、紙には何の文字も残されないまま出現は終わってしまった。ベルナデットによれば「その必要はない」と洞窟の女性がいったという。このエピソードは煉獄をめぐる民衆的信仰を考えないと分りにくい話である。中世カトリシズムは天国と地獄という二つの死後の世界に加えて、両者の中間項にあって天国への橋渡しをする煉獄界を説明した。一定期間ここで浄化をへた魂がやがて天国へと

到るための過渡的段階にあたり、これらの魂がすみやかに浄化されるには生者たちのミサが必要だと考えられていた。そしてミサ・祈り・断食の励行を現世の人々にたのむために、死者の霊は煉獄からこの世への舞いもどってくるものと信じられたのである。その時に死霊が現われる相手は親類縁者もしくは擬似的な親族集団、つまり同じ宗教共同体に属するメンバーということになっていた (J. Le Goff, *la Naissance de purgatoire*, Paris, 1981, pp. 392-4)。

#### 4

煉獄の魂説とその実験がよく示すように、ルルドの出来事がどのようにして人々に解釈されていき、どのように聖母出現の信憑性を高めていったのかを知るためには、こうした摩可不思議な現象をめぐる民衆文化が蓄積してきた伝承的背景とでもいうべきものを考えなければならぬ。神秘体験者が神秘体験を演じきるといふことは、体験者の伝えるメッセージなりその所作なりが民

衆文化に内在する出来事の解釈料にそむくことなく、ふさわしい要素のふさわしい組合せによって一貫した物語をそこに構築することである。(2)の泉の発生はこの「ふさわしい要素」の最たるもののひとつだが、加えて何故主人公が一四歳の少女であったかということも「ふさわしさ」にかかわるテーマである。

聖母出現をめぐる「ふさわしさ」の体系として「羊飼いの伝説群」とよばれる伝承があった。その基本的要素には、子供もしくは若い羊飼いの娘への出現、聖母のメッセージ、奇蹟の泉、自然発生的な巡礼、礼拝堂の建立、その場所の不思議を記録する活動的な司祭の登場、などがある。もちろんこうした中世的伝承類型がたんに文化表象として宙にういていたわけではない。ユイスマンが指摘していることだが、ピレネー山麓一帯には一九世紀ルルドに先行する数多くの聖母巡礼地が点在している。タルブ司教区のエア、バルバザン、サンサバン、ガレゾン、バイヨンヌ司教区のベタラムなど、いずれも聖母出現の類型をふみながら一六世紀以前に成立した聖地であ

る (J.-K. Huysmans, *les Foules de Lourdes*, Paris, 1906, pp. 2-12)。したがってルルドを突発的な孤立した奇蹟の町と考えるのはまちがっている。むしろそれはビゴール地方の聖母出現文化をふまえた複数の事例のひとつであり、一九世紀ルルドにおいても類似の経験はベルナデットひとりのものではなかった。つまり問題は何故とりたててベルナデットの洞窟体験が広く受容され信仰を集めてきたのか、何故とりたててルルドの出来事が……ということにたる。宗教的には先にあげた(2)が、教会史的には(3)がこの点に深くかわつてくる。

## 5

二月二五日の九回目の出現をきっかけに洞窟には泉が湧きはじめたと伝えられついる。のちに幾多の病治しで世界的規模の信仰をあつめ、現在もなお年間三百万を越える巡礼者を魅了しつづけている奇蹟の泉のことである。この日、ベルナデットに「泉の水を飲み、洗いなさい」というお告げが下った。その時にはまだ洞窟に泉は

なかったので、ためらいがちに河にもどりがけるのを「あれ」が呼び返す。とまどうベルナデットの行手、洞窟つきあたりの左奥に水気をふくんだ赤い泥土があった。これを手でほりおこして穴をあけ、泥水をくり返すくって四度目によりやく口に含むことができた。もう一度すくいあげた水で顔を洗うと、さらにあたりの雑草を口に入れて食べるようすをみせる。出現が終った時、ベルナデットの顔はひどい汚れようだったという。

この日の出来事は事態をみまもる人々に大きなショックを与えた。とりわけ二日ほど前から洞窟に足を運びはじめていた知識階級の人々にとって、泥水を口にふくみ、草を食べる少女の姿は落胆と疑惑の対象になった。この雑草（正確にはユキノシタ科ネコノメソウ属——山足の湿地や谷間に普通にみられる多年草）については、その後の司祭やタルブ司教らによる尋問の焦点のひとつとなった。つまり「草を食べさせるといえるのは聖母にふさわしいとは思われない」（司教）というのである。これに対するベルナデットの答えは「私たちはサラダを食

べます」（一八六〇・一二・七）という人をくったものだった。雑草をめぐるベルナデットの所作は、こうした獣や悪魔的存在への疑惑を聖職者たちに生むことはあっても、その後もついに何の奇蹟も実現せず、何の宗教的意味づけも与えられないままに放置されてきた部分である。「ふさわしさ」の体系とのかかわりでいえば、基本的類型に収まりきらない異質の要素であり、解釈料をはみ出したあやうい部分である。

ところが洞窟に泉（らしきもの）が湧きはじめたことは、こうした「あやうさ」を吹きとばす効果をもっていた。その日の午後、ベルナデットの掘った穴を棒で押しひろげると水が湧きはじめ、掘るにつれて透明になっていったという。これが「奇蹟の泉」の評判を得るようになるのは三月以降のことだが、当日すでに病気の家族に水をもち帰った人々があらわれている。ということは、この泉という要素の介入がビレネー山麓の水にまつわる民俗的価値（奇蹟の水の治癒力への信仰）を吸収し、聖母出現譚の典型的完成をはたしたということである。聖



母と洞窟の群れをつなぐ唯一の仲介者だったベルナデットはその役目を終え、教会と聖母をつなぐ次の役割を負いつつあった。ベルナデットという生きたパイプ役のかわりに洞窟が得たのは、泉の水という恒常的な奇蹟の媒体であり、他界との交通路であった。つまり洞窟はそれ自身の宗教的完成によってベルナデットを不要としはじめていたのである。

6

ルルド教会と直接交信するようになってからの聖母（というかベルナデット）の物語については簡単に経過だけをべておこう。三月二日（二三回目）、「行列」と「礼拝堂」の要求を受けたベルナデットは初めて教会にメッセージを伝える。司祭の返答は、洞窟に現われたという要求主の「名前」と「奇蹟」の二つだった。三月二五日（一六回目）、出現の女性はいよいよ「私は無原罪の宿りです」との回答を与える。これは教会史的に決定的な意味をもつ言葉だった。四年前の一八五四年、教皇

による「聖母無原罪の御宿り」の宣言がなされており、これをルルドに現われた聖母自身が追認する形になったからである。

四月から七月にかけて警察の干渉にもかかわらず洞窟ではベルナデット以外の少女たち、子供たちの神秘体験が続発した。洞窟を中心にみれば、まずベルナデットの媒介によって他界との通路を恒常的に確保するにいたった洞窟空間が、ここではさらに新たな不思議を人々に経験させる段階にまで到達したことになる。冒頭にのべた世界各地のルルドの複製も、こうしたプロセスの延長線上に位置することがらである。残念なことに、この段階ではもはや子供たちの登場する余地がない。

Ⅱ この項終りⅡ

（筑波大学）